

[原著] 松本歯学 9 : 38~46, 1983

key words: 歯科教育 - 方法論 - 性格検査

歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究  
第8報 CPIとYG性格検査の年度的推移(1)

小林美樹, 清水みや子, 丸山寛子, 宮川 崇, 谷内秀寿,  
坂口賢司, 橋口緯徳

松本歯科大学衛生学院 (学院長 橋口緯徳 教授)

A Methodological Study on Technical Aptitude Ability Survey  
in Dental Education  
Eighth Report : Annual changes of CPI and YG character test (1)

MIKI KOBAYASHI, MIYAKO SHIMIZU, TAKASHI MIYAGAWA,  
HIROKO MARUYAMA, HIDETOSHI TANIUCHI, KENGI SAKAGUCHI  
and HIROYOSHI HASHIGUCHI

*Matsumoto Dental College,  
Dental Hygienist and Technician School  
(Principal : Prof. H. Hashiguchi)*

Summary

The authors have been examined the effectiveness in judging the students' aptitude by observation and comparison from a synthetic point of view. For the above examination, the Technical Skill Ability Test since 1980, California Psychological Inventory (CPI) since 1980, and Yatabe-Gilford Character Test (YG Character Test) since 1981 were carried out on the students of Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School. This time the following points were studied: (1) the annual comparison and examination of the results of CPI among the same graders of Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School from 1980 to 1982, (2) the comparison of annual changes in every class in the class of 1980 and the class of 1981, (3) on YG Character Test: the percentages of five types at each class in the class of 1981 and the class of 1982, (4) the comparison of annual changes on the five types, (5) the comparison and examination regarding the relation between CPI and YG Character Test with Spearman rank correlation coefficient. Through the researches above the following results were obtained.

(1) The annual comparison among the same graders on CPI, in both Hygienist Class and Technician Class, turned out to make no change on the whole, while every grade and

class showed the highest value in Group 4.

(2) The annual comparison in every class on CPI turned out to make no change in its general tendency. However, the average marks of three classes out of four proved to be higher in their second year than in their first year.

(3) The percentages of the five types of YG Character Test at each class are as follows: in Hygienist Class, Group D-37.6%, Group A-26.6%, Group B-25.0%, Group C-5.9%, and Group E-5.1%, and in Technician Class, Group D-49.0%, Group C-16.1%, Group B-15.3%, Group A-15.1%, and Group E-4.5%.

Group C turned out to show the higher numerical value in Technician Class while it showed a low value in Hygienist Class.

(4) Concerning the annual changes in the five types of YG Character Test, in Hygienist Class, those who belonged to Group A in their second year as well as in their first year were only two persons out of twelve original members, and the other ten persons were dispersed into other groups. In Technician Class, out of six persons who belonged to Group A in their first year, only one person remained in the same group in his/her second year, and the other five persons moved out to other groups.

On Group D, out of 14 first graders of Hygienist Class, 10 of them remained in the same group in their second year, and in Technician Class, 9 persons out of 11 first graders remained in the same group in their second year. In Group D there is no such transfer as in Group A, and it has an almost atable distribution.

(5) Extracting the items that are deeply related from CPI and YG Character Test to make a comparison with each other, high correlativities were observed between the items of CPI (DO: Dominance) and YG (A: Ascendance), both in Hygienist Class and in Technician Class. Also between CPI (Sy: sociability) and YG (S: social extraversion), high correlativities were found in both classes.

## 1. 緒 言

現在社会の多くの分野で心理検査が活用されるようになった。その心理検査は、個人差を明確にし、行動の評価、予見、指導に役立てることを目的として行う。

医療従事者を志す者の人格養成・向上は、技術力の養成と共に、専門学校に課せられた指導内容の一つでもある。そこで我々は、松本歯科大学衛生学院生徒を対象に昭和55年度より実施している技術・技能試験と並行し、カリフォルニア人格検査(CPI)を昭和55年度より、矢田部・ギルフォード性格検査(YG性格検査)を昭和56年度より行い、医療人としてまた社会人としても適応できる人格を養うための資料の一つとして、総合的な見地から適性を判断する有効な手段の一つとして、個人及び集団をいろいろな観点から比較検討し、それを分析し報告してきた。

今回は CPI における昭和55年から57年の衛生学院生徒の各学年の年度的推移と、CPI及びYG性格検査における昭和56年度生の在学2年間の年度的推移を比較検討してみた。また、昭和56年度1年生、2年生、昭和57年度1年生のCPIとYG性格検査との関係について調べてみた。

## 2. 方 法

①昭和55年から57年度までの、歯科衛生士科1年(H<sub>1</sub>)、歯科衛生士科2年(H<sub>2</sub>)、ならびに歯科技工士科1年(T<sub>1</sub>)、歯科技工士科2年(T<sub>2</sub>)の同一学年におけるCPI項目及び群別の得点の比較を、それぞれの学年の平均点を基準として検討した。

②昭和55年度生と56年度生の歯科衛生士科ならびに歯科技工士科における同一クラスによる年度的推移について各項目及び群別を比較するため、1年次、2年次の総合得点平均を基準として比較

表1：YG 性格検査項目

|            |   |          |
|------------|---|----------|
| D 抑鬱性      | } | 情緒不安定性因子 |
| C 回帰性傾向    |   |          |
| I 劣等感      |   |          |
| N 神経質      |   |          |
| O 客観性欠除    | } | 社会不適応性因子 |
| Co 協調性欠除   |   |          |
| Ag 愛想の悪いこと |   |          |
| Ag 愛想の悪いこと | } | 活動性因子    |
| G 一般的活動性   |   |          |
| G 一般的活動性   | } | 衝動性因子    |
| R のんかさ     |   |          |
| R のんかさ     |   |          |
| T 思考的外向    | } | 非内省性因子   |
| A 支配性      |   |          |
| S 社会的外向    | } | 主導性因子    |

表2：YG 性格検査プロフィールの類型

| タイプ       | 尺度  | 情緒不安定性 |     |     |    | 社会適応性 |      |    | 向<br>(活動性・活動性・主導性) |    |    |    |
|-----------|-----|--------|-----|-----|----|-------|------|----|--------------------|----|----|----|
|           |     | D      | C   | I   | N  | O     | Co   | Ag | G                  | R  | T  | A  |
| (A) 平均型   | 平   | 均      | 平   | 均   | 平  | 均     | 平    | 均  | 平                  | 均  | 平  | 均  |
| (B) 右寄り型  | 不安定 | 不安定    | 不安定 | 不安定 | 不適 | 不適    | 不適   | 外向 | 外向                 | 外向 | 外向 | 外向 |
| (C) 左寄り型  | 安定  | 安定     | 安定  | 安定  | 適  | 適     | 適    | 内向 | 内向                 | 内向 | 内向 | 内向 |
| (D) 右下がり型 | 安定  | 安定     | 適   | 適   | 適  | 又は平均  | 又は平均 | 外向 | 外向                 | 外向 | 外向 | 外向 |
| (E) 左下がり型 | 不安定 | 不安定    | 不適  | 不適  | 不適 | 又は平均  | 又は平均 | 内向 | 内向                 | 内向 | 内向 | 内向 |

|             |                |               |                |                 |
|-------------|----------------|---------------|----------------|-----------------|
|             |                |               |                |                 |
| A 平均型 (平凡型) | B 右寄り型 (不安定傾型) | C 左寄り型 (安定傾型) | D 右下がり型 (安定傾型) | E 左下がり型 (不安定傾型) |

検討した。

③ YG 性格検査 (表 1, 表 2) は, 昭和56年度 H<sub>1</sub>, T<sub>1</sub>, 昭和57年度 H<sub>2</sub>, T<sub>2</sub> を 5 類型に分類し, 各クラス別の比率を求めた。

④ YG 性格検査5類型における年度の推移を, 昭和56年度生において人数で求めた。

⑤ CPI と YG 性格検査の関係を求めるため, 今回は特に関連のあると思われる CPI の Do(Dominance)―指導性の能力, 支配性, 根気強さ, 社会的先導力の程度を測定する―と YG 性格検査の A (Ascendance)―会やグループのために働く, 引込み思案でないなどのソーシャルリーダーシップである―. CPI の Sy (Sociability)―外向性, 社交性, 人づき合いの良さの性質をどの程度もっているか

を測定する―と YG 性格検査の S (Social extraversion)―一人との交際を好む, 人と話しをするのはすきであるなどの社会的接触を好む傾向―を抽出して, C・Spearman の順位相関係数を求めた。

### 3. 成 績

①昭和55年から57年度までの H<sub>1</sub>における CPI の 3 クラス総合得点平均は44点で, 各クラスとも高得点を示した項目は Fx(融通性, 56~57点の間にあり, 平均56点), So(社会的成熟性, 50~53点の間にあり, 平均51点), Ai (自立的な成就欲求, 50~51点の間にあり, 平均50点), Fe(女性的傾向, 50~51点の間にあり, 平均50点), Gi(自己顕示性, 48~53点の間にあり, 平均50点), Sc(自己統制力, 47~51点の間にあり, 平均49点)であり, 一方低い得点を示した項目は, Cm (社会的常識性, 24~35点の間にあり, 平均31点), Cs(社会的成就能力, 36~40点の間にあり, 平均38点), Do(支配性, 38~41点の間にあり, 平均39点), Wb (幸福感, 36~40点の間にあり, 平均39点), Ac(順応的な成就欲求, 38~42点の間にあり, 平均40点)であった。群別にみると第4群 (知的な型および興味様式を測定する) が高く, 第1群 (心的安定感, 優越性, 自信の程度を測定する) が低い得点であった。得点傾向は第2群 (社会化, 成熟性, 責任感の程度を測定する) から第4群においては同じ傾向にあるが, 1群に若干のばらつきがみられる (図 1)。

H<sub>2</sub>では総合得点平均は44点で, 各項目で高得点を示すものは H<sub>1</sub>と同様, Fx (56~59点の間にあり, 平均57点), So(50~52点の間にあり, 平均51点), Ai (50~52点の間にあり, 平均51点), Sc (48~50点の間にあり, 平均49点), Fe(48~50点の間にあり, 平均49点), Gi(47~51点の間にあり, 平均49点)であり, 低得点を示すものは, Cm (33~37点の間にあり, 平均35点), Cs(36~39点の間にあり, 平均37点), Ac(38~40点の間にあり, 平均39点), Do(39~41点の間にあり, 平均40点), Wb (39~40点の間にあり, 平均39点)であった。群別では4群が高く, 各群においては H<sub>1</sub>にみられたようなばらつきはあまりみられない (図 2)。

T<sub>1</sub>においては総合得点平均は44点, 各項目クラス得点はそれぞれにばらつきはあるが, 高得点を

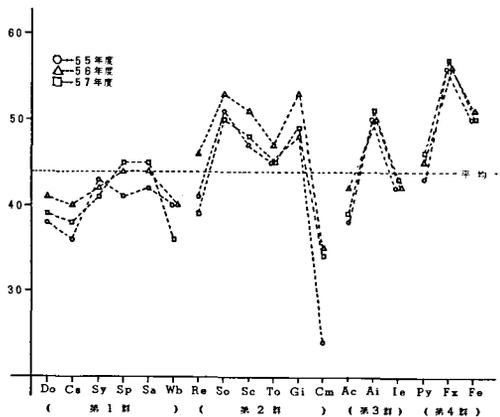


図1：CPIにおける年度的比較 (H<sub>1</sub>)

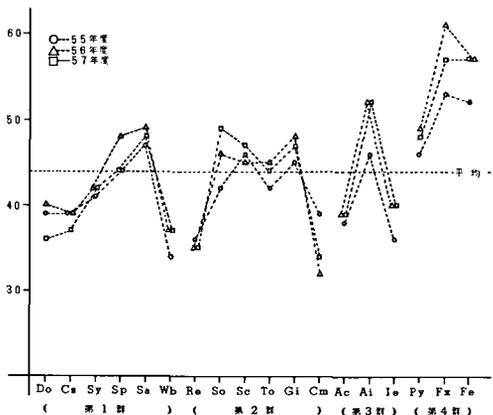


図3：CPIにおける年度的比較 (T<sub>1</sub>)

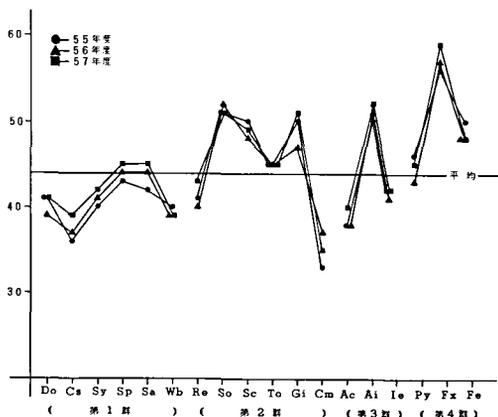


図2：CPIにおける年度的比較 (H<sub>2</sub>)

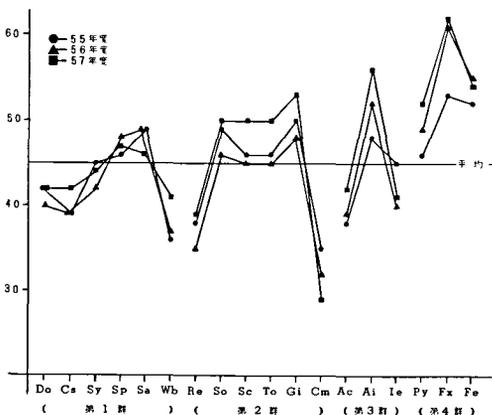


図4：CPIにおける年度的比較 (T<sub>2</sub>)

示すものは、Fx(53~61点の間にあり、平均57点)、Fe(52~55点の間にあり、平均54点)、Ai(46~52点の間にあり、平均50点)、Sa(自己満足感、47~49点の間にあり、平均48点)、Py(共感性、46~49点の間にあり、平均48点)であり、低得点を示すものは、Cm(32~39点の間にあり、平均35点)、Re(責任感、35~36点の間にあり、平均35点)、Wb(34~37点の間にあり、平均36点)、Ac(38~39点の間にあり、平均39点)、Cs(37~39点の間にあり、平均38点)、Do(36~40点の間にあり、平均38点)、Ie(知的能力、32~39点の間にあり、平均35点)であった。群別では4群が高く、得点傾向はH<sub>2</sub>と同様であった(図3)。

T<sub>2</sub>では総合得点平均は45点、各項目で高得点を示すものは、Fx(53~62点の間にあり、平均59点)、Fe(52~55点の間にあり、平均54点)、Ai(48~56

点の間にあり、平均52点)、Gi(48~53点の間にあり、平均50点)であり、低得点を示すものは、Cm(29~35点の間にあり、平均32点)、Re(35~39点の間にあり、平均37点)、Wb(36~41点の間にあり、平均38点)、Ac(38~42点の間にあり、平均40点)、Cs(39~42点の間にあり、平均40点)であった。群別では4群が高く、得点傾向は若干のばらつきはあるが、T<sub>1</sub>と同じような傾向を示す(図4)。

以上の総合得点平均についてみると、H<sub>1</sub>44点、H<sub>2</sub>44点、T<sub>1</sub>44点、T<sub>2</sub>45点と近似点を示す。

② CPIにおける昭和55年度生歯科衛生士科(H)の2年間の推移をみると、クラス総合得点平均は1年次43点、2年次44点であり、項目別みると2年次の方が高得点を示す項目は、Do、Cs、Sp(社会的安定感)、Sa、So、Sc、Cm、Ai、Fx

であり、得点差の著しいのはCmであった。群別得点傾向は1群を除きほぼ似たような傾向にあった(図5)。

昭和56年度生Hでは、クラス平均が1年次46点、2年次45点、項目別にみると2年次が高いのは、Sp, Sa, Ai, Fxであり、得点差の著しい項目はみられなかった。群別得点傾向は全体的にほぼ似たような傾向にあった(図6)。

昭和55年度生歯科技工士科(T)では、クラス平均が1年次43点、2年次45点、各項目において2年次が高いのはDo, Sy(社交性), Sp, Sa, Wb, So, To(寛容性), Gi, Ac, Ai, Ie, Py, Fx, Feであり、得点差の著しいのは, Cm, Ai, Fxであった。群別得点傾向は第2群にばらつきがみられた(図7)。

昭和56年度生Tでは、クラス平均は1年次44点、2年次47点、項目別にみると2年次が高いのは、Do, Cs, Sy, Sp, Sa, Wb, Sc, To, Gi, Ac, Ai, Ie, Py, Fxであり、得点差の著しいのは、Cs, Sp, To, Giであった。群別得点傾向は第1群、第2群に若干のばらつきがみられた(図8)。

③ YG 性格検査においては、昭和56年から57年の生徒を5類型に分類した比率は、HはD類(安定積極型)が最も高く34.3~42.4%の間にあり、次いでA類(平均型)20.0~36.4%、B類(不安定積極型)20.0~31.4%、C類(安定消極型)0~9.1%、E類(不安定消極型)0~8.6%の順であり、TもD類が最も高く39.1~56.5%の間にあり、次いでA類4.3~23.8%、B類9.5~21.1%、C類9.5~21.7%と同じような値を示し、E類が最も低い値0~9.5%の間にあった(表3)。

④ YG 性格検査5類型における年度の推移を56年度生で検討した結果、A類より他類への移動が最も多くH、T共に83%みられた。一方D類よりの移動はHで29%、Tで18%と最も少なかった(表4)。

⑤ CPI 項目のDoと、YG性格検査項目のAにおけるの相関をみると、 $\rho$ がHで0.59~0.64、Tで0.43~0.74の間にあった(表5)。同じようにCPI項目のSyとYG性格検査項目のSにおけるの相関をみると、 $\rho$ がHで0.67~0.72、Tで0.47~0.60の間にあった(表6)。

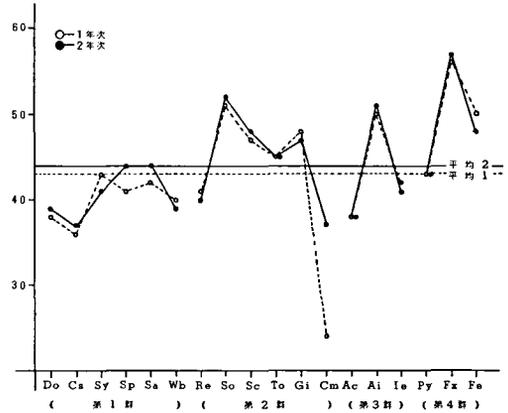


図5：CPIにおける同一クラスの年度の推移 (S55年度生 H)

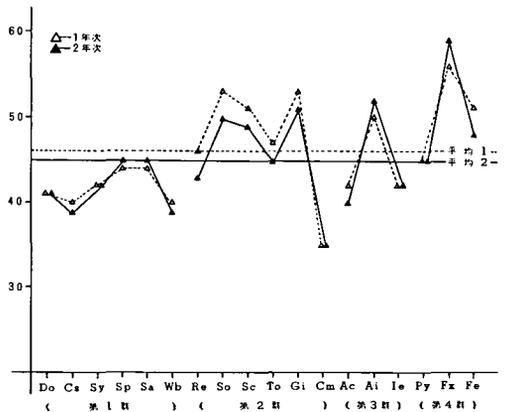


図6：CPIにおける同一クラスの年度の推移 (S56年度生 H)

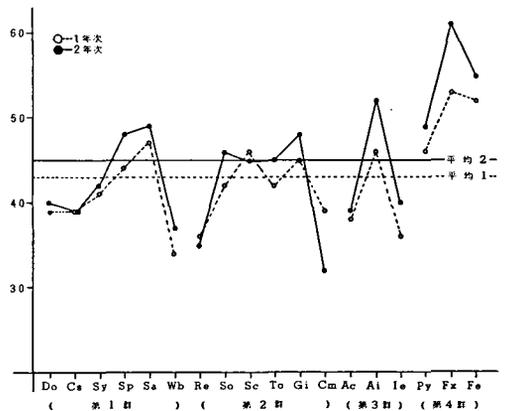


図7：CPIにおける同一クラスの年度の推移 (S55年度生 T)

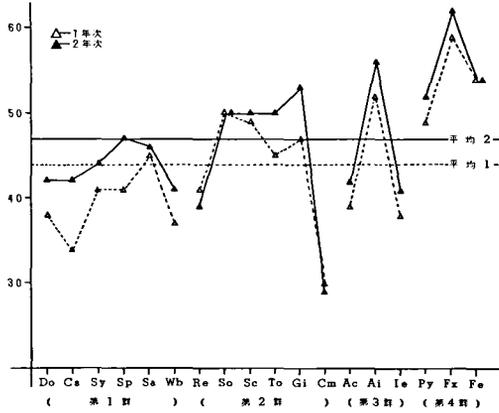


図8：CPIにおける同一クラスの年度の推移 (S56年度生 T)

表3：YG検査5類型における各クラス別の比率 (%)

| 年度  | 類型<br>クラス | A              | B              | C              | D              | E             |
|-----|-----------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|
| S56 | H1        | 36.4           | 21.2           | 0              | 42.4           | 0             |
|     | H2        | 20.0           | 31.4           | 8.6            | 34.3           | 5.7           |
| S57 | H1        | 28.6           | 20.0           | 5.7            | 37.1           | 8.6           |
|     | H2        | 21.2           | 27.3           | 9.1            | 36.4           | 6.1           |
| S56 | T1        | 21.7<br>(20.0) | 13.0<br>(16.7) | 21.7<br>(16.7) | 39.1<br>(36.7) | 4.3<br>(10.0) |
|     | T2        | 23.8<br>(21.4) | 9.5<br>(10.7)  | 9.5<br>(10.7)  | 47.6<br>(42.9) | 9.5<br>(14.3) |
| S57 | T1        | 10.5<br>(7.1)  | 21.1<br>(25.0) | 15.8<br>(10.7) | 52.6<br>(57.1) | 0<br>(-)      |
|     | T2        | 4.3<br>(10.0)  | 17.4<br>(20.0) | 17.4<br>(16.7) | 56.5<br>(50.0) | 4.3<br>(0.3)  |

( )は女子を含む

表4：YG検査における年度の推移 (S56年度生)

| (H)        |      |      |      |       |      | (T)        |      |      |      |       |      |
|------------|------|------|------|-------|------|------------|------|------|------|-------|------|
| S57<br>S56 | A(7) | B(9) | C(3) | D(12) | E(2) | S57<br>S56 | A(3) | B(6) | C(5) | D(15) | E(1) |
| A(12)      | 2    | 3    | 3    | 2     | 2    | A(6)       | 1    | 1    | --   | 4     | --   |
| B(7)       | 2    | 5    | --   | --    | --   | B(5)       | 1    | 3    | --   | 1     | --   |
| C(0)       | --   | --   | --   | --    | --   | C(5)       | --   | --   | 4    | 1     | --   |
| D(14)      | 3    | 1    | --   | 10    | --   | D(11)      | --   | 1    | 1    | 9     | --   |
| E(0)       | --   | --   | --   | --    | --   | E(3)       | 1    | 1    | --   | --    | 1    |

(人数)

表5：CPI項目(Do)とYG項目(A)における順位相関係数(ρ)

| 各年度における<br>クラス     | ρ    |
|--------------------|------|
| S56-H <sub>1</sub> | 0.59 |
| S56-H <sub>2</sub> | 0.62 |
| S57-H <sub>1</sub> | 0.64 |
| S56-T <sub>1</sub> | 0.70 |
| S56-T <sub>2</sub> | 0.43 |
| S57-T <sub>1</sub> | 0.74 |

表6：CPI項目(Sy)とYG項目(S)における順位相関係数(ρ)

| 各年度における<br>クラス     | ρ    |
|--------------------|------|
| S56-H <sub>1</sub> | 0.72 |
| S56-H <sub>2</sub> | 0.72 |
| S57-H <sub>1</sub> | 0.67 |
| S56-T <sub>1</sub> | 0.60 |
| S56-T <sub>2</sub> | 0.58 |
| S57-T <sub>1</sub> | 0.47 |

#### 4. 考 察

性格を理解し、診断しようとする試みは古くからなされ、古くは骨相や人相、筆蹟などで種々試みられてきた。現在では調査目録法性格検査、作業検査法性格検査、投影法性格検査、などと呼ばれる方法が考案され、性格を構成する要素の客観的な把握に活用されるようになった。我々は単にこれら1つを試みるのではなく、専門学校という特殊な分野での教育上の測定、評価、あるいは適性をみきわめるため、性格検査と技術能力との比較、専門教育学力との比較、他の性格検査との関連を研究してきた。また、個人及び性格項目の優劣をクラス平均において関連づけて相対的な位置づけを見いだしたり、年度の推移を比較し、個人あるいは集団の特質について確かめ、人間の全体性におけるの価値感について考察することに努めてみた。

CPIについては、昭和55年から57年の各学年の年度の比較結果によれば、年度間の差は歯科衛生士科1年、2年、歯科技工士科1年、2年とも各項目において若干のばらつきを認めるが、それ程に大きくはないことがわかる。群別の得点傾向も同じような傾向を示した。同一クラスの年度の推移の結果からも、1年間の推移は若干のばらつきを除いて各項目得点、群別得点傾向に大きな差はないことがわかった。これらから、対象となった生徒は20歳前後の青年期の人達であり、児童期から自主独立する成人期への過渡期におこりがちな身体的変化への適応、友人への適応、人生観の確立などの問題による精神的、情緒的混乱もややおちつき、安定してきていると推察される。項目別にみても、どのクラスも1群のSp, Sa, 3群のAi, 4群のFxが1年次より2年次に高得点を示している事から、1年の間に対人関係も活発になり、話も流暢、自分に自信を持つようになることがわかる。反面、どのクラスも2年次に1年次より低得点になった項目Reから、自己中心的、個人的偏見があり、独断によって影響されやすいという、未だ未成熟な部分も残っている事に注意しておかねばならない。群別では各クラスとも第4群が最も高く、これは第4群が広く高まいた意義をもつ人生に、どういう態度で対処するかを調べる項目であるため、将来の職業が決定している専門学校

を選択した者にとっては当然高いのではないかと推察される。また、第1群の心的安定性、優越性と自信の程度の判定について低値を示しているのは、高等学校教育が受験教育のみを考え、真の教育不在にあり、社会の多様化に反して逆に画一化され、学問的知識のみの習得につとめ沈黙考し、その知識の意味を考えず、活用出来ない傾向にあり、自立的思考、行動能力に欠けていることがこの成績を見て良く判る。また、4クラスのうち3クラスは1年次平均より2年次平均が高得点になっているが、昭和56年度生歯科衛生士科においては、2年次平均が1年次平均より低くなっている事から、成長期にある青年においても、必ずしも年度的な人格の向上がみられるという事はいえない。

次にYG性格検査について考察すると、5類型における年度の推移で、A類に属した者の他類への移動が目立つのは、A類はすべての性格特性について平均的な性格特性を示す者で、積極的にこれといって強い性格診断を下しにくい平凡なタイプの人達であるためと推察される。

人間の心理状態は時期や環境あるいは体調等によって変動するおそれが充分あると思われ、テストの妥当性を考えた場合、1つのテストで個人の能力や特性を絶対的なものとしてきめつけてしまうのではなく、他のテストも平行して実施し、その相関を調べる事により、多面的に検討をする事が望ましい。また、教育においてはその点を十分に注意し、個人の客観的な判断にはその都度多面的に注意をはらう必要がある。

#### 5. 総 括

昭和55年から57年度までの松本歯科大学衛生学院生徒における、CPIの同一学年の年度の比較検討を行った。次に昭和55年から56年度生における同一クラスによる年度の推移比較を行った。YG性格検査については、昭和56年、57年度生について5類型における各クラス別比率を求め、次いで5類型における年度の推移を比較した。さらにCPIとYG性格検査との関係について比較検討を行った事により、次のような結果が得られた。

CPIにおける同一学年の年度の比較について、  
①歯科衛生士科、歯科技工士科ともに多少のば

らつきはみられるが、各項目及び各群において全体的傾向に変化はない。

②各科、各学年の総合得点平均は、 $H_1$ 、 $H_2$ 、 $T_1$ が44点、 $T_2$ は45点であった。

③各学年、各クラスとも第4群が最も高い値を示した。

CPIにおける同一クラスの年度的推移比較について、

④各尺度および群別得点傾向は、歯科衛生士科、歯科技工士科ともに多少のばらつきはあるが、全体的傾向に変化はない。

⑤各クラス平均点は、4クラスのうち3クラスが1年次より2年次に高得点を示すが、昭和56年度生Hにおいては2年次が低い値を示し、必ずしも年度的に高得点化の傾向を示す事はない。

YG 性格検査5類型における各クラス別の比率をまとめてみると、

⑥全体の平均を高い順に示してみると歯科衛生士科ではD類37.6%、A類26.6%、B類25.0%、C類5.9%、E類5.1%であり、歯科技工士科では、D類49.0%、C類16.1%、B類15.3%、A類15.1%、E類4.5%の順であった。

YG 性格検査5類型における年度的推移についてまとめてみると、

⑦1年次A類のものが2年次も同じようにA類に属しているのは、歯科衛生士科では12名のうちわずか2名であり、他の10名は他類へ分散されていた。歯科技工士科については、1年次A類6名のうち2年次にもA類に属する者は1名、他の5名は他類に移動していた。

⑧D類は歯科衛生士科1年次14名が2年次で10名、歯科技工士科1年次11名が2年次9名と、A類のような移動はみられず、ほぼ安定している。

CPIとYG性格検査との比較においてまとめると、

⑨CPI項目(D<sub>0</sub>)とYG検査項目(A)において歯科衛生士科0.59、0.62、0.64とかなりの相関が認められ、歯科技工士科0.43のかなりの相関、0.70、0.74の高い相関が認められた。

⑩CPI項目(S<sub>y</sub>)とYG検査項目(S)において歯科衛生士科0.67のかなりの相関、0.72の高い相関が認められ、歯科技工士科0.47~0.60のかなりの相関が認められた。

以上の⑨⑩は、CPIとYG性格検査のうち関連が深いと思われるものを抽出し、高い相関を見出したものである。

以上まとめてみると、CPIにおける同一学年の年度的比較並びに同一クラスの年度的推移は各項目各群において多少のばらつきはあるが、全体的にあまり変化はなかった。

第4群において高い値を示していることにより、人間社会生活において最も重要な対人関係、社会の適応性があることが判り、第1群が低いことにより、最近の青年の傾向ともいべき根気がなく、自主性に欠けることがこの研究データにおいていえると思う。

YG性格検査では歯科衛生士科、歯科技工士科共にD類が最も多く、安定した生活になじみ、情緒的にも安定し、社会的にも適応が良いと思われる。

#### 参考文献

- 1) 橋口緯徳, 谷内秀寿, 坂口賢司 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第1報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術力, 技能力について. 日歯技工誌, 2(1): 45-51.
- 2) 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 橋口緯徳(1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第2報 松本歯科大学衛生学院生徒の人格検査. 松本歯学, 7: 95-103.
- 3) 谷内秀寿, 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第3報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術能力と人格検査との比較. 松本歯学, 7: 104-110.
- 4) 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第4報 技術力と技能力の経年的観察(1). 日歯技工誌, 3(1): 68-73.
- 5) 丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 谷内秀寿, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第5報 松本歯科大学衛生学院生徒のCPI年度的推移とYG性格検査について. 松本歯学, 8: 63-69.
- 6) 谷内秀寿, 丸山寛子, 宮川 崇, 坂口賢司, 橋口緯徳 (1982) 歯科教育における技術適応能力診断

- の方法論的研究, 第6報 技術, 技能力, 人格検査および専門教育学力との比較. 松本歯学, 8: 70-76.
- 7) Gough, H.(1956) California Psychological Inventory. Consulting Psychologists Press, California.
- 8) 我妻 洋, 川口茂雄, 白倉憲二(1980) カリフォルニア人格検査 (CPI)・実施手引. 3版. 誠信書房, 東京.
- 9) 辻岡美延(1965) 新性格検査法・YG 性格検査実施  
 応用研究手引, 日本・心理テスト研究所, 大阪.
- 10) 安藤公平, 大村政男, 花沢成一, 佐藤 誠(1982) 心理検査の理論と実際. 改訂版. 駿河台出版社, 東京.
- 11) 辰野千寿(1968) 心理学(系統看護学講座29). 医学書院, 東京.
- 12) 肥田野直, 瀬谷正敏, 大川信明(1979) 心理教育統計学. 培風館, 東京.
- 13) 大平他(1976) 現代心理学—行動の科学—. 建帛社, 東京.